# また、時は流れて

## ―追想の今村先生

今村先生追悼文集刊行会

# また、時は流れて——追想の今村先生

# 今村先生を偲んで

木佐茂男

田舎の大学で、私が法律学を学び始めた頃、行政法の学界に問題提起をし続けておられた「今村先生」は、雲のはるかはるか上の存在であった。

京大の大学院時代、今村先生を集中講義にお呼びすることが決まった。先生が図書館長から学長になられる時期であったかと思う。残念だが行けないという趣旨のお葉書が届いた。この葉書をすぐには判読できなくて、院生が頭を寄せあって、この字は?、あの字は?、と推測したのだが、今となっては懐かしい思い出である。

まさか、私が北大に勤務できることになるとは夢想だにせず、まして親しく先生とお話しする機会が訪れるとは思ってもいなかった。

赴任したのは十五年余前の一九八二年の春。その一年前に先生は学長を退いていらっしゃったが、幸いにも北大公法研究会でお会いすることができた。正式にはこの研究会でご挨拶をすることになるのだが、実は、その前に、北大の構内でお会いした。全くの偶然のことであったが。





着任後間もない時期である。私は講義の予習に追われていた。日曜も出校して研究室にこもり、次回の講義に備えるのが精一杯だった。そんな日、私は息抜きの散歩に出かけた。

旧恵迪寮へつながる原生林の中の小径の端でカメラをぶらさげて、草花を眺めているご老人(失礼!)に会ったのだ。何か珍しいものでもあるのですかと、私が聞いたのであろう。その方が顔をあげて私を見られた。それは、学生の頃、写真で見たことのある今村先生その人であった。しどろもどろに自己紹介をすることになったのだが、北大に来たことを実感したできごとの一つである。

今村先生の「気さくな」お人柄については、何人かの方が書かれるであろう。研究会でも院生と対等に議論をされ、そしてちっとも偉ぶったところのないシャイな性格は、冒外に研究者のありようを示しておられると、私自身、来し方を振り返るたびに思う。

今村先生のお酒の全盛期は存じ上げない。しかし、酒豪だったのであろう。今から、二〇年か二五年前より室井力先生が何度もおっしゃっていたことが思い出される。正確にいつの出来事かは定かでないが、外国産の洋酒がきわめて貴重品であった頃のことであろう。室井先生が大事にされていた高級ウィスキーを、同先生の表現によれば、今村先生は「クイッ、クイッ!」とあっと冒う間に一本飲んでしまわれた、とか。室井先生にとっても、よほどショックなことだったのであろう。

私にも、ささやかなお酒にまつわる思い出がある。赴任して間もないころ、二次会だったと思うが、くすんだといっていいような飲み屋に誘って下さった。お年をめしたママさんが一人だけ。客などほとんどいない。ただ、帰り際に店の名前を見たら、「札幌SMクラブ」。ススキノの街角のビルのテナ

ント碍板にもはっきりとそう書いてある。入る前なら、どんなすごいところかと思ってしまう。後から聞けば、「札幌メンバーズ・クラブ」の略だと。シャイな感じで寡黙な先生に実にふさわしい雰囲気であった。このクラブのことを向田教授や稗貫教授に聞いてみたが、ご存知なかった。そうすると、先生にここに連れていっていただいた者はごくわずかであったのかもしれない。

お亡くなりになる前の最後の外出は、九六年五月二二日に園部最高裁長官代行をお迎えしたときの研究会だったそうである。昼食会では園部判事の隣に座っていただいた。園部先生は、今村先生も出席の予定と聞かれて、えらく恐縮なさっていた。それでも、結局は最後の機会となったものの、今村先生をご案内し、私どもも親しくお話しできたことを嬉しく思う。

今村先生の時代に始まり七〇年代ににぎやかだった行政法学の方法論に関する議論の火が消えたようになってから久しい。先生が現在もっておられる行政法学界に対する感想など、率直なお話をもっと積極的に聞いておくべきであった。常日頃からそう思ってはいたけれども、こと改めて言い出しにくく、実現のチャンスを失ったことがただただ残念である。



# V

北大「原始林」にて(1980年頃)

また、時は流れて——追想の今村先生

一九九七年九月二六日　発行

編集
発行　今村先生追悼文集刊行会
札幌市北区北九条西七丁目
北海道大学法学部公法資料室気付
〇一一(七〇六)三八六二

製作　北海道大学図書刊行会

装幀　須田照生

㈱アイワード／石田製本